

# 秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成24年7月1日(第1218号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



絵／文 白澤 恵舟

暑いある日、絵の中で、早春の山峡に遊びに行った。  
小魚の漁も始まったらしい湖に、写り輝く残雪が、心に涼を招く。  
このまま、しばし猛暑の日々を忘れることにしよう。

## 地域に建設企業が必要であることを示していく

### 第31回定時総会

秋田県建設青年協議会(大沼武彦会長)は6月18日、秋田ビューホテルを会場に第31回定時総会を開会し、会員40名が出席した。

総会議事に先立ち大沼会長が挨拶。新規の公共工事が減少し、さらに運営が厳しくなる中、新分野への参入をはじめ業務形態を変えたり、震災復興に関し制度について理解を深めることなどが必要と述べ、その上で「地域の雇用維持に貢献、地域に建設企業が必要であることを示していく」と意志を表明し、会員の協力を求めた。

議事では、平成23年度収支予算及び



事業報告、平成24年度収支予算(案)及び事業計画(案)が上程され、いずれも

満場一致を持って承認・可決された。

## 平成24年度通常総会

### 新会長に須田光宏氏(岩手県)

東北建設業青年会(船山克也会長)は7月20日、盛岡市のホテルメトロポリタン盛岡ニューウィングで平成24年度通常総会を開き、11年度決算及び12年度予算(案)、事業計画等を可決した。

総会の冒頭、船山会長は、今年は震災復興を軌道に乗せる年であるとし、建設業が行政と一体となって復旧に取り組まなければならないと述べ、「社会資本整備の重要性と地域建設業が正しく

理解されるよう情報発信に努めたい」と挨拶した。

役員改選では、新会長として須田光宏氏(岩手県建設業協会青年部連絡協議会・株式会社平野組)が選任され、秋田県建設青年協議会からは前年に引き続き、大沼会長が副会長、吉田副会長が理事として選任された。

総会に続いて行われた特別講演では、佐藤直良国土交通省技監が「地域建設業への期待」と題して講演し、社会資本の維持において地域建設業が地域のホームドクターとして重要な役割を果たすと述べ、新たな社会資本整備を提起していくべきと述べた。また、土木と建築の違いをキーワードとして挙げ、土木にも建築のような定期的なアフターケアの仕組みが必要であるとの考えを示した。



# 第31回定時総会



秋田県アスファルト合材協会(加藤義光会長)は6月21日、秋田ビューホテルで第31回定時総会を開会。会員30名が出席したほか、来賓としてから石山良英県建設部技術管理課長と加藤俊章日本アスファルト合材協会東北連合会常務理事が来場した。

総会冒頭に加藤会長が挨拶し、アスファルト合材の製造数量がピーク時の半分まで減少している中、プラントの統廃合、保有重機を減らしながら運営を維持している事に触れ、「災害時に重機を出動させるなど大きな役割を担っており、社会資本整備の重要性も震災以降再認識されている」と述べた。

議事に先立って行われた日本アスファルト合材協会功労者表彰の伝達・披露において、今年度受賞者の北部建設株式会社・清水衛アスファルトプラント所長が紹介され、加藤会長から賞状伝達並びに記念品授与が行われた。

議事では、平成23年度収支決算・事業報告、平成24年度収支予算(案)及び事業計画(案)が上程されたほか、社内人事異動による監事の変更・追認が諮られ、新監事として世紀東急工業株式会社の佐藤哲氏が真田孝之前監事の残任期間を引き継ぐことが承認された。

## (財)建設業福祉共済団から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

# 秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター  
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、ある他  
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル  
写真塾・写案 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.35

## ポートタワー・セリオン

秋田市土崎港



1994年に秋田港の岸壁に「ポートタワー・セリオン」が完成し、高さ100mの展望台が800円の入場料でオープンしたとき、正直なところ筆者は、どれだけのお客を獲得できるだろうかと、疑問に思ったことがある。絶景とか風光明媚とかいうのであればそれを見させてもらうのに応分の対価を払うのは当然だが、セリオン展望台からの眺めは、どちらかと言えば「凡庸」である。お金を払ってまで昇りたくなくなる魅力があるかどうか……。

案の定、わずか2年後には運営会社の経営悪化が報じられるようになり、入場料を半額に値下げしたがそれも焼け石に水。金額の問題ではなく、「有料」であるということ自体に人々がひっかかりを覚えた結果であろう。

その後紆余曲折があつて、2007年にはついに無料になった。これは大英断であり、かつ正しい判断であつたと思う。現金なことだが、その年の入場者は歴代2位の33万人超。前年の実に6倍以上にも上つた。この種の施設の存在意義の一つは「賑わい創出」であろうから、人集つてもらわないことには意味がないのだ。

秋田港湾事務所のホームページには、秋田港をはじめとした県内の港への大型クルーズ船の寄港情報が詳細に掲載されている。今年も竿燈の時期を中心に秋田港は大型客船で賑わいそうだ。そんな大型客船の入出港風景をセリオンの展望台から眺めるのは、なんとも楽しいひとときである。

見晴らしのいい展望台から大型客船を眺めて、自分もいつかあんな船に乗って優雅なクルーズを楽しんでみたいと夢想してみたり、水平線に沈みゆく夕日にうっとりしてみたり、雪が降り始めてうっすらと白くなつていく町並みを見下ろしたりするのは、やはりお金をとらない展望台が似つかわしい。

維持費の捻出のためにお客から金をとるのは本末転倒だ。お金をとりたければ、お客にはそれに見合う十二分な満足感が提供されなければならぬ。

## エコトピア

菅 禮子

このごろ、雑誌や広告で「エコ」という文字をよく見かける。右を向いても「エコ」左を向いても「エコ」……そもそもエコとは何ぞや？—有斐閣の経済辞典で調べてみると「生物と環境の相互作用についての学問をエコロジーという」とあった。

人間が生きていくために環境を利用して暮らしに必要な物を創り出す火の歴史は古い。わたしが“火”というものを認識したのは、小学校時代、国語の本に載っていた「稲むらの火」という一文であった。村長が丘の上の自宅の庭から、眼下に広がる田園でせつせと稲の刈り入れに働く百姓たちの姿を眺めているうちに、ふと彼方を見やると、海の水平線から白い帯のような線が一本、みるみるうちに太くなって陸へと迫ってくるのが目に入った。「つなみだ！」叫んでも声は届かない。村長は決断した。取り入れて庭にはさ掛けに並べてある稲むらに次々と火を放った。火はまたたく間に燃え広がり、その黒煙は天を焦がした。「庄屋さまの家が火事だ！」それを見て百姓たちはこぞって走り出し、丘の上の村長の家へ駆け登ってきた。村長は一年分の財産である稲を残らず失ったが、代わりに村人たちの命を救ったのである。

昨年の東日本大震災における“つなみ”は記憶に生々しい。人、家という家、車、船、あらゆる物をのみこみ、押し流し、破壊し尽くした。しかも、この大地震と“大つなみ”は、福島第1原発の事故、それによる放射能——地域の汚染により、これまで科学技術によって支えられ、発展して来た現代文明を根底からひっくり返した。私たちは利便と快適を誇る生活を考え直さなければならない。

再び“火”に戻る。十数年前、わたしは、東北電力のPR誌「ともしび」のルポライターとして飯島の火力発電所に取材に行ったことがある。百数十メートル？はあろうと思われる巨大な煙突から煙が吹き出されていた。「あの煙は森や山に降り落ちてからどうなりますか？」と訊くと、「あとは野となれ、山となれですよ」係の人は笑みをたたえて答えられた。煙に含まれる炭酸ガスは大気中にばら撒かれて地球環境を温暖化する。無責任ではないか？と心中ひそかに思った。東北電力もそのことを問題視していた。というのは、それからしばらくして「大潟村」に風車の取材に行くよう依頼された。この頃から東北電力は化石燃料を使わない発電を模索されていたと思われる。取材先の大潟村では農業短大の教授が「大潟村は、常時毎秒5mから10mに及ぶ風の強いところなの

で、風力発電の候補地であるのでしょ」と言われた。とにもかくにも風力発電は有害な炭酸ガスなどを出さない。大気を汚さないのだ。その後、あちこちで風車を見かけるようになったが、大潟村に風車の姿はほとんど見かけない。ということ、元・八戸工大の佐藤正毅教授に申し上げると、先生は穏やかな笑顔で語った。「農産物直売所のそばにマグナス風車が建っています。自転する円筒が風を受けると気流が速くなる方向に揚力が働き、円筒がその方向に動くことを応用したものです。秋田発の新型風車ですね。風速が毎秒0.7m程度から回りだし、低速回転、低騒音で鳥の衝突も少ないようです。」

いずれにせよ、大潟村は、冬期の吹雪など風車の新設には何らかの支障があるのであろう。もし実現できたら小規模でも電力王国となり、自給自足による大都市を現出せしめたのではなかろうか……

ところでその夢の実現に力を注いでいる町がある。大潟村の東に位置する五城目という（人口10,723人——平成24年4月現在）町で隣接する八郎潟町の有志を含む30数人のささやかな団体だが、いずれも町を背負って立つすぐれた知能集団で、彼らの素晴らしいところは、単なる机上の論議だけでなく、逞しい実行力を兼ね備えていることだ。「エコトピア湖東」というのが集団の目標を現した名である。エコトピア——即ちエコライフによる自給自足の理想郷の実現というのが目標である。わたしも自分の生活の場として暮らしている町であるので、趣旨に賛同、一会員になって時折、学習に参加させていただいている。学習によってその実践活動の成果をたどってみると、彼らが始めに実践したのは各家庭で分別された生ゴミの収集・堆肥化である。そして、収集生ゴミ2,291kgから、使用可能な堆肥3,581kgを試作した。また、町内の土に棲む土着菌による堆肥の効果を野菜栽培で確かめている。あるいは、間伐材を使用してシイタケ栽培を実施、これを朝市などで販売、いわゆる資源循環型社会の実現化を目指している。——（以上、平成24年度総会における事業報告に拠る）

さらには、風力発電所の新設、従業員雇用なども勘案しながら、電力の自給、あるいは首都圏に電力を売電・供給するなど経済の活性化とエコライフによるユートピアを郷土に実現しようとする真に壮大な計画なのだ。これが単に30人余の夢でなく全町民、あるいは湖東地域の住民が一丸となって取り組んで、経済的自立、美しい環境の保全、自然エネルギーの活用によって、いわゆるエコトピアを実現したいものである。